

## R-1

### 青少年教育施設における幼児期の自然体験活動 ～国立立山青少年自然の家での取り組み～

#### Natural Experiential Activities for Infancy in Youth Education Center

○ 福富 優、小林 祥之（国立立山青少年自然の家）

国立立山青少年自然の家では、年間 200 団体 8,000 人を超える幼稚園・保育園（所）が自然体験活動をしている。また、年長児を対象とした宿泊を伴うキャンプを年 3 回（夏・秋・冬）企画している。幼稚園・保育園（所）が利用しやすい環境とはどのようなものか、よりよい幼児期の自然体験活動のあり方とはどういったものか、国立立山青少年自然の家が長年かけて実施してきた様々な環境整備や調査などの取り組みについて報告する。

## R-2

### 高校における水辺活動を取り入れたプールでの体育授業の実践

#### Teaching Practice of Water-front Activities in School Education

○ 松本 英樹（大阪教育大学附属高等学校平野校舎）

新学習指導要領が実施され、生徒の主体的な学習や多様性を踏まえた指導の充実を図ることが可能となった。本校では、近年の猛暑に対応するため「プールでおこなう授業」と「屋内でおこなう授業」を選択して実施することにした。選択希望調査では、7割の生徒が水泳を選択せず「水泳授業嫌い」が問題となっている。そこで、カヌーやスクーバダイビング等の水辺活動を取り入れた授業を実践し、生徒の意識や授業運営について検討した。

## R-3

### 必修専門基礎科目における「マリンスポーツ体験」 ～スノーケリング実習の教育効果～

#### “Marine Sports Experiences” in required specialized basic subject - Educational effects in Snorkeling Practice-

○ 遠矢 英憲、東恩納 玲代、前川 美紀子、田原 亮二、石橋 千征（名桜大学）

沖縄県の亜熱帯自然環境を活かした特色ある初年次教育として開講された、スポーツ健康学科1年次対象必修専門基礎科目「スポーツ健康演習」のカリキュラムのうち『マリンスポーツ体験-スノーケリング実習-』計5回の授業（外部講師＜第11管区海上保安庁救難課＞による講義1回、講義1回、プール実習1回、海洋実習2回）が、マリンスポーツ基礎能力、集団・バディ行動能力、安全行動能力に与える効果について実践報告を行う。

## R-4

### 幼児を対象とした絵本でつくるワークショップ

#### Workshop to make with the picture book for early childhood

○ 瀧 直也（淑徳大学）

淑徳大学では、幼児を対象に絵本の世界を体感するワークショップを行っている。

このワークショップは、「言語」「造形」「情報」「野外教育」という異分野のゼミが連携し、絵本の物語を単に再現するわけではなく、そこから広がる世界観を体感できるプログラムを展開している。本報告では、平成25年度の「からすのおかしやさん」を題材としたワークショップの概要を報告する

## R-5

### 幼児の社会的スキル向上について（一考察）

#### About social skills improvement of the infant (one consideration)

○ 室井 修一 （国立妙高青少年自然の家）

国立妙高青少年自然の家では、幼児とその保護者を対象に1泊2日のキャンプを年に4回実施した。通年を通して参加した子どもの保護者から（11名）から、社会的スキルについての調査を行った。キャンプ運営では、「自分のことは自分で行う」、「仲間と協力して活動する」などに着目し、子どもたちの援助を行った。今回、運営者及び保護者からみた子どもの社会的スキルの変容について報告する。

## R-6

### 「能登・乗鞍 施設間連携事業 自立心を育む体験プログラム」の実践報告

#### The report of “The actual practice of experience program to cultivate self-reliance”

○ 田尾 一郎 （国立乗鞍青少年交流の家）

国立乗鞍青少年交流の家と国立能登青少年交流の家は、平成23年度より「能登・乗鞍 施設間連携事業 自立心を育む体験プログラム～海から山へ！塩の道をたどる～」を実施している。本事業は、両施設のもつ海と山のプログラムを有機的に結びつけ5泊6日で展開した施設間連携事業である。古来より飛騨と能登を結びつけていた「塩の道」について学ぶことや、集団宿泊体験を通して自立心を育むことを趣旨としている。

東京海洋大学におけるサバニレースへの取り組み

Challenge to The SABANI Sailing Race by the student of  
the Tokyo University of Marine Science and Technology

○ 千足 耕一、蓬郷 尚代（東京海洋大学）

サバニとは、フーカキサバニ（帆かけサバニ）とも呼ばれ、沖縄で古くから海の民の日常の足として使われていた舟のことである。このサバニを復活させようと、沖縄県座間味島から那覇港までの約 25 海里（約 36km）をサバニによって渡るレースが今年で 15 回を迎える。東京海洋大学海洋スポーツ・健康科学研究室では第 10 回大会から出場しており、昨年の古式サバニ購入・進水式・レースに至るまでの取り組みを報告する。